

氏名	林 慎 一 郎
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学位 授与 番号	甲 第 7 9 号
学位授与の日付	昭和37年 3 月31日
学位授与の要件	医学研究科内科系内科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	肝障害時の水及び電解質代謝に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 小坂 淳 夫 教授 平 木 潔 教授 水原 舜 爾

学 位 論 文 内 容 要 旨

肝疾患患者の血清電解質の変動を検討し次の結果を得た。即ち血清 Na 濃度は正常群に比較して急性肝炎, 慢性肝炎, 再発性慢性肝炎, 肝硬変の順に低下し, その傾向は慢性化が進むにつれて著明である。次に肝静脈カテーター法を用い食塩を負荷して肝を中心とした血清電解質の変動を末梢動脈・肝静脈血濃度較差について観察した。急性肝炎治癒期群では Na の肝内収容を示したのに対して肝硬変群では逆に肝外放出を示し, 肝内への Na 貯留能の減退を意味している。之に対して水分量の変動は肝硬変群では, 急性肝炎治癒期群と対蹠的で肝内収容方向に動き肝組織内水分の増加が窺われた。肝生検材料について肝組織内水分量を測定した結果でも肝硬変群が最も多い。更に四塩化炭素障碍肝を用いて肝組織内水及び電解質代謝異常を組織学的観察を加えて検討した。組織内水分量は肝内 Na 量と平行して増加し, 慢性化につれてその傾向が目立っている。又肝実質細胞の水腫性変性, 壊死の強さと肝組織内水分量との間にも一定の相関が認められ, 間質の増殖の強さは水分貯留に対して附加的に働き肝硬変における組織内水分量増加の重要な因子と考えられる。

(日本消化器病学会雑誌 第59巻第5号掲載予定)

論文審査の結果の要旨

林慎一郎提出の「肝障害時の水及び電解質代謝に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

肝が水及び電解質代謝の中樞の一つとして重要な位置を占めていることは周知の通りであるが、肝障害時の変化については未決定の部分が多い。そこで林は先ず肝疾患時における末梢流血中の電解質につき検討を加え、急性肝炎、慢性肝炎、再発性慢性肝炎、肝硬変の順に血清 Na 濃度は低下し、その傾向は慢性化が進むにつれて著明であることを認めている。次いで肝静脈カテーテル法を用い、肝静脈血を採取し、これと末梢静脈血、動脈血の水及び電解質を測定、10%食塩水負荷時の変動を追及すると共に、一部は肝穿刺により肝組織中の水及び電解質を測定して検討を加え、血中水分量の出納は Na と対蹠的で、急性肝炎治癒群、慢性肝炎群では肝外への放出を示すに対し、肝硬変群では肝内への収容を示した。又肝組織内水分量は壊死後性肝硬変で最も多く、Glisson 鞘内細胞浸潤と正の相関を認めた。これらの所見に実験的肝障害ラットについての実験で確かめられた。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。